

論文

教師の力量形成に関する研究（その1）

生野金三・金田健史・齊藤武利・齋藤一人・
内山須美子・中谷陽子・豊澤弘伸・北村好史

A Study of Development of Teacher's Competence

SHONO Kinzo, KANEDA Takeshi, SAITOU Taketoshi,
SAITOU Kazuto, UCHIYAMA Sumiko, NAKATANI Youko,
TOYOSAWA Hironobu, KITAMURA Yoshifumi

1 はじめに

教育職員養成審議会は、1997年7月に「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」の第1次答申を発表した。その答申の内容は、諮問に掲げられた検討事項のうち、「教員に求められる資質能力と教職課程の役割」「教員養成カリキュラムの改善」等が中心となっている。

今日の社会の状況や学校や教育をめぐる諸問題を踏まえるとき、教育職員養成審議会は「これからの教育には、変化の激しい時代にあって、子どもたちに『生きる力』を育む教育を授けることが期待される。」とし、そしてこのような観点より、今後特に教育に求められる具体的な資質能力を掲げ、そしてその改善の方策として「(a) 地球的視野に立って行動するための資質能力」「(b) 変化の時代を生きる資質能力」「(c) 実践的指導力につながる資質能力」等を指摘する。

(a) をめぐっては

今日は極めて変化の激しい時代であり、世界の人々の日々の営みは国境を越えて様々に影響を及ぼし合うようになってきている。21世紀を生きる子どもたちには日本国民であるとともに「地球市民」であることが求められ、したがって、子どもたちの教育に直接当たる教員もそれに相応しい資質能力が不可欠である。／このような資質能力の基礎を教員を志願する者に適切に修得させる一つの方途として〈中略〉我が国社会全体に関わるテーマのうちいくつかについて、ディスカッション等を中心に十分理解を深めさせるとともに、それらの内容を発達段階に応じてどのように教えたらいのかについて教員を志願する者に自ら考えさせるような授業が、大学の教職課程において適切に工夫される必要がある。

とし、そして (b) をめぐっては、

大学の教職課程では、教員を志願する者の課題解決能力、創造力、応用力等の涵養や継続的自己教育力の育成に重点を置いて、授業の内容・方法を工夫することが求められる。〈中略〉実際に使える知識や技能を修得させるだけの質を備えたものであることが不可欠である。

とし、さらに (c) をめぐっては、

教職課程の授業内容については、理論中心で実践との関連性が十分でないとの指摘がしばしばなされるが、授業方法についても、過度に講義中心であるなど十分に工夫されているとはいえない。教職課程において、各大学・教員は、より具体的・実践的で理解しやすく、教員を志願する者の興味を喚起する授業方法を工夫する必要がある。」

としている。

これらは、いずれも資質能力の基礎を教員を志願する者に適切に修得させる一つの方途として掲げられている内容である。いずれも教職課程の教育内容に関わる主な問題点を踏まえ、その上で内容を改善するための基本的な視点といえる。

ここでは、大学の教職課程の授業内容を発達段階に応じてどのように教授するかについて教員を志願する者に自ら考えさせるような授業、また教員を志願する者の課題解決力に重点を置き、学び方が分かる効果的な教育方法を導入した授業等とあるように授業方法を工夫する必要があるとしている。ここからは、教職課程におけるそれらの授業科目の内容や方法の抜本的な充実を図ることが求められていることが分かる。言ってみれば、大学は学問の内容論や方法論を基に、将来実践の場で柔軟に活用できるだけの実践的指導力の基礎を構築するような授業内容や方法を適切に工夫する必要があるのである。

上記のことを踏まえ、本研究では教員に求められている資質能力の育成（とりわけ実践的指導力の基礎の育成）を志向し、教職に関する科目や教科に関する科目における模擬授業について、受講者である学生の教師としての力量形成にどのように関与していくかについてその様相を探ることを目的とする。

2 模擬授業の方法と内容

先の教養審の答申のなかでも指摘され、教育職員免許法にも反映されている「模擬授業」であるが、その実際は実にさまざまな形態・展開があるといえることができる。ここでは、とりあえず、受講者である学生を児童に見立てて授業を行うことを、広く模擬授業と呼んでおくこととする。

模擬授業においては、学生は普段学んでいる仲間を相手にして授業を行うことになる。今回の考察の対象とする事例では、授業設計の段階で指導者のあり様、そして学習者の実態把握の必要性について学生たちが学んでいるので、実際の授業の場では、それぞれの置かれた立場を認識しながら授業に参加することになる。そして、授業者は自分の教材解釈が学習者に受け入れられたか否かが確認し、一方学習者はいかに対応の仕方（対処）が授業者にとって重要であるか否かを確認する。このようなことが豊かな

授業理解、教師の力量形成に繋がっていくと考えられる。

大学になって、学生は初めて模擬授業を体験することになる。そのため、模擬授業の運営に関しては、全員が余裕をもって授業の準備ができ、授業が行えるように配慮する必要がある。また、そのねらいを正確に理解させておくことも重要である。

今回の模擬授業は、「国語科教育法」の基礎論である「国語概説」において実践したわけであるが、「国語科教育法」において実践的指導力の基礎を確実に育成するための準備としてなされていることと、授業（模擬授業）に関わる基本的な事項について学生に熟知させておくことが必要となった。

本科目は必修であり、40名の学生が受講している訳だが、全ての学生が授業を行うのは無理なため、模擬授業はグループ単位で行うことにした。

具体的には、6～10名でグループを構成し、各グループの代表1名（TTの場合は2名）が25分で授業を行うこととした。模擬授業の実施に向けて、作業は各グループ同時進行で行い、模擬授業までの間に学習指導案をグループごとに作成しそれについて検討する機会を設けることとした。まず、グループ内で各々で学習指導案を作成し、それを持ち寄り、いずれの学習指導案で授業を行うかを検討し、絞られた1点についてさらに修正を重ねることとした。その後、それに対する意見等を基に、再度修正し模擬授業用の学習指導案を完成させ、それに基づいて授業を行うための諸準備をした。

3 授業観察の視点

授業は授業者による創造的活動であったり、科学的創造であったり、さらには芸術的創造であったりと様々な性格を有していると言及されている。それゆえに、授業には質の違いが存在する。その授業の質であるが、それは授業を受ける児童の質（立場）にも依存していることはいうまでもない

が、児童の質の違いにどれだけ対応した授業であるかということが授業の質を決定するという意味では、結局授業の質は授業者の質によるといわざるを得ない。その授業の質であるが、それは浅く貧しい授業から深く豊かな授業まで多種多様である。「国語概説」では、授業に関して受講者である学生の豊かな理解を促し、授業者としての質を高めること等を志向し、授業を見る視点として、「(1) 授業を受ける児童（学習者）の立場」「(2) 授業を行う授業者（指導者）の立場」「(3) 授業を参観する第三者（観察者）の立場」の三点を設定した。

(1) 授業を受ける児童（学習者）の立場

これは、主に模擬授業を児童の立場で受けるという体験を通して授業の見方や考え方をとらえようとする立場である。導入で本時の学習課題を確認する場面、そしてそれにしたがって学習活動を行い、課題を解決する場面、さらに本時の学習を整理し、次時の学習を確認する場面等を学習者として体験的に学ぶことによって、それぞれの学習過程における指導のあり様についての見方や考え方をとらえることができよう。

(2) 授業を行う（指導者）の立場

これは授業設計（単元の研究、教材の研究、指導の研究）から授業の実際までを自ら授業者として体験を経験することによって授業の見方や考え方を構築しようとする立場である。以下に「国語概説」の授業で授業設計から授業の実施直前までの過程についてどのような内容を取扱ったか、その概要を述べる。

ここでは、授業設計のあり様を単元の研究、教材の研究、指導の研究等の面から解説を行い、と同時に授業の実際についての様相を教材「ごんぎつね」（新美南吉）によって具体的に（読みの展開過程を提示して）解説を行った。以下に授業設計のなかの「指導の研究」の例を掲げる。

<指導の研究>

単元の研究、教材の研究等は、いずれも指導の研究を視野に入れたいわば基礎的作業であるといってもよいであろう。この指導の研究については、まず学習指導（本時案＝略案）を配布し、そしてそれにしたがって学習活動を展開する際、予め準備しておく必要があると考えられる発問事項（計画）、板書事項（計画）、作業用のプリント等を提示しながら、学習指導案を（本時案＝略案）の作成のポイントを解説した。以下、その解説に用いた学習指導案（本時案＝略案）を掲げる。

【本時案】（略案）

1 目標

「結果～理由」の説明手法を手掛かりにたんぼぼの軸が倒れる理由を叙述に即して読み取ることができるようにする。

2 準備

教材のプリント、作業のプリント、たんぼぼの絵、短冊

3 実際

過程	時間	主な学習活動	留意点
問題把握	3分	1 本時の学習の目当てを確認する。 なぜ、たんぼぼのじくがたおれるのだろうか。	・前時の学習から、本時の目当てを確認させる。
解決方法課題追求	30分	2 学習の方法を知る。 3 本時に学習する場面を読み、読み取ったことをまとめる。 (1) 音読する。 (2) 黙読する。 (3) 大事な部分に線を引く。 (4) プリントにまとめる。	・「かえるのくらし」の学習を確認させる。 ・「春になると」「二、三日たつと」「けれども」等の時を表す言葉に着目させながら範読を聞かせる。 ・たんぼぼの様子（「黄色いきれいな花」「だんだん」「ぐったり」）がよく分かる叙述に、特にたんぼぼの軸が倒れる理由（「じくをしずかにやすませて」「たねに……えいようを送って」）が分かる叙述等にそれぞれに線を引かせる。 ・たんぼぼの軸が倒れる理由を中心にプリントにまとめさせる。

過程	時間	主な学習活動	留意点
		4 まとめたものをもとに話し合う。 (1) 春～黄色いきれいな花 (2) 二、三日たつと・花はしぼんで、黒っぽくなる。 ・軸はぐったり倒れる。 (3) 軸が倒れる理由。 ・軸を休ませる。 ・種に栄養を送っている。 (こうして) ・種は太る。 (以下略す。)	・指示語「その」や接続語「そうして」「けれども」の働きより文と文との関係に気付かせる。 ・理由を説明している文末（の）に気付かせる。 ・たんぼの軸が倒れる理由を板書や挿絵によって気付かせる。（「生野実践」より引用） (1973年)

この本時案（略案）は、指導計画のなかで教材「ごんぎつね」の精読の最初の段階に相当するものである。以下に受講生である学生に対し、この本時案（略案）について解説した内容を簡約する。

【解説】

1の「目標」について

国語科の単元は、言語経験のひとまとまりである。その言語経験は内部的に「何について」という内容価値と「何をどうする」という能力価値とをそれぞれ目指している。ここでは単元が内部的に目指す内容価値を目標とする内容目標と単元が内部的に目指す能力価値を目標とする能力目標との両者一つの文にまとめて掲げる。場合によっては、内容目標、能力目標をそれぞれ列挙することもある。

2の「準備」について

目標を達成するために必要な教材や教具を具体的に掲げる。

3の「実際」について

表の形式で、本時の学習の全体像が明確に分かるように述べる。「過程」は、問題解決的学習の過程に即したものであるが、単元によっては「導入」⇒「展開」⇒「終末」の三段階で述べる場合もある。「時間」は、活動の節目に入れる。「主な学習活動」の部分では、目標に迫るための順序を過

程に沿って、児童の活動を述べる。その際、学習方法や形態も合わせて述べる。「留意点」の部分では、学習活動について指導上、特に注意する点や思考活動を誘発するための指導上の留意事項を述べる。また、準備する教材や教具等の利用についても留意点も述べる。

この「本時案」(略案)についての解説を基に実際の授業を行うに当たっては、主たる発言・発問事項(具体例を提示して)を考えたり、そして板書計画を立てたり、さらに児童の読みを支援する作業のプリントを作成したりしておく必要がある。授業は教師の発問等を中核として展開され、特に教師の発問が授業の成否を決める鍵であると言及されている。次の、板書であるが、それは教育機器の発達した現在においても、教室で行われる授業においては極めて重要な視聴覚メディアである。例えば、発言・発問の要点を学習の流れにしたがって板書することで、学習活動の道筋が記録され、またそれは授業の整理の段階で学習を振り返り、重要事項を確認することにも役立つのである。いま一つの作業のプリントであるが、それは個人々の読解活動を意識的に行わせ、そして個に応じてその能力を発揮させるものである。また、児童がまとめた作業のプリントは、その後の学習の場で個々の学習を全体の交流の場に生かし、相互啓発し合うものとなる。この作業のプリントは教師にとっても授業を展開していく上でとても有効な資料となり得る。教師が作業のプリントによって個々の学習の実態を把握することができれば、それは個別指導や次の学習の方向や手順を考察する際の重要な資料となり得るからである。

学習指導案(本時案=略案)の「目標」「準備」「実際」などの内容について解説を行い、そして実際の指導に当たっては発言や発問を検討しておくこと、板書計画を立ておくこと、作業のプリントを作成しておくことなどについて触れた。このようなことによって受講生である学生は、実際の授業を行う際には指導の研究を綿密にしておくことの必要性に気付くであろう。

(3) 授業を参観する第三者（観察者）の立場

これは、授業観察記録を取り、その記録を手掛かりに学習の構造や具体的な指導法に対する見方や考え方を学び取り、個々の授業の改善に結び付けようとする立場である。今回は授業の観察記録の取り方から授業の観察記録の分析までに、①授業の観察記録における逐語記録、②授業の観察記録の内容、③授業記録の整理、④授業記録の分析等の内容について解説を行った。

以上、模擬授業をめぐる、それを見る視点について三つの立場より触れてきた。次に、模擬授業を通して、教師の力量形成がいかにはかられているかについて、種々の観点から分析した結果を記述する。

4 模擬授業の成果と課題

(1) 模擬授業アンケートに見る学生の問題意識

まずは、模擬授業を学生たちがどのようにとらえているかを、複数のアンケートから浮き彫りにしてみたい。はじめに、授業を受けた側の学生たちが注目した点についてまとめたものを掲げる。

順位	票数	項目
1	32	板書
2	23	発問、発言への準備
2	23	漢字の書き順
4	22	ワークシート
5	21	教材研究
6	19	黒板に貼る資料、教材の必要性
7	7	学習の目当ての提示
8	6	日々の指導内容の確認
8	6	授業方法の工夫
10	5	グループで話し合うことの必要性
10	5	音読による重要部分の把握

順位	票数	項目
12	4	学習指導要領の把握
12	4	児童の学力の把握
12	4	教育内容の明確な意識
12	4	言葉遣い（教師の）
16	2	発問の仕方の工夫
16	2	語句指導
16	2	ノートへの複写
19	1	教師の声量
19	1	児童への態度の一貫性
19	1	各授業ごとの総括
19	1	児童の発表
19	1	調べ学習
19	1	適度に余裕を持つ
19	1	読みの指導
19	1	教科書へのサイドライン
19	1	個の重視
19	1	授業時における教師の立つ位置
19	1	授業の流れの重要性

このうちの上位を詳しくしたものが次の表である。

順位	項目	票数	主な理由、意見
1	板書について	32	<ul style="list-style-type: none"> ● 児童にスムーズに文字を読ませ、理解させるため綺麗な文字を書かなければいけない。 ● 事前に計画しておかなければ板書にまとまりがなくなり、児童の混乱を招いてしまう。 ● 重要な語句は色を変える。
2	発問、発言への準備について	23	<ul style="list-style-type: none"> ● 児童により授業内容に対する感じ方、考え方は異なるので、ある程度予測を立てて回答を考えておく必要がある。 ● ただ答えるだけではなく、教師から問いかけて児童に考えさせ、答えに導くことも必要である。

教師の力量形成に関する研究（その1）

順位	項目	票数	主な理由、意見
2	漢字の書き順について	23	<ul style="list-style-type: none"> ● 児童の見本である教師が誤った書き順で漢字を用いることは許されない。 ● 単に漢字を書かせるだけでなく、正確に書けるようになる方法を工夫する。
4	ワークシートについて	22	<ul style="list-style-type: none"> ● 教師が書いたものを書き写すだけでは児童の思考力は伸びない。挿絵など楽しく考えられる努力を必要とする。 ● 自己学習力、自己教育力が身に付く。 ● 考え方、意見を書いて残すことができる。
5	教材研究について	21	<ul style="list-style-type: none"> ● 児童が教材を詳しく理解する為、まずは教師が教材の内容をしっかりと把握しておく必要がある。 ● 授業の方向性が確定する。
6	黒板に貼る資料、教材の必要性について	19	<ul style="list-style-type: none"> ● 児童の理解度を増すため、挿絵など視覚的に効果のある資料を貼る必要がある。 ● 言葉で表しにくく、理解しにくいものの補完性がある。

ここにおいて、学生自身が学習者の立場から見て必要だと感じる指導者の能力としては、「板書能力」、「声掛け」、「円滑な授業の進行」、「教材の活用」等の四点が多かった。なかでも、板書能力に関しての意見が特に多く、学生は、「綺麗な文字を大前提として色分け等の工夫をして見やすい板書することが重要だ」と考えている。声掛けの点については、「適切な声量で授業を進行し、指導者と学習者のコミュニケーションをスムーズに行う必要がある」という意見が多かった。以上の二点からは、「明確な意思疎通、学習内容的確な指示等が必要である」という考えを窺い知ることができる。

さらに、円滑な授業の進行については、個々人の能力に合わせて学習のペースを作るという意味合いで、そのためには学習者全員の学習の実態をとらえる広い視野も持たなければならない、という意見が多かった。教材の活用も、その円滑な授業の進行を達成するための一部と考えている。

以上の四点を、学生は「学習者が求める指導者の能力」と考えている傾向にあることがよく分かった。

これに対して、「学習力養成の促進」という観点からは、「事前の綿密な授業計画」、「教材の活用」、「声掛け・机間巡視等のコミュニケーション能力」の三点を重要なものとしてとらえていることが分かる。これらについては、授業計画をしっかりと立ておくことで、スムーズに授業を展開することができ、学習者の集中力と理解度を深めることができる、という意見が多く見られた。さらに、児童の発問に対する応答を考慮しておくことも重要、という意見も含まれる。教材活用に関しては、的確な教材（ワークシート、短冊等）を選択し、有効に使用することができる能力があれば、学習者の理解を手助けすることができ、そのための教材研究も重要である、という意見が目立った。また、机間指導や適切な声掛け等のコミュニケーション能力は、個々の学習者の態度や能力の把握につながり、集中力とやる気を喚起させるのに重要であるという意見が目立った。指導者が発問をした際に、学習者を答えに導くような工夫も必要であるという意見も見られた。

以上の三点の様子から、これらは「学習力養成の促進」に不可欠の存在であることが理解できる。

(2) 模擬授業を実施、指導する立場の観点からの分析

教養審の答申からも、教員を志願する学生の教職課程において実践的指導力につながる資質能力の向上を図ることは、大学側にとっては早急に取り組むべき、不可欠の課題である。前述したように、具体的には、「授業を企画・設計する力」、あるいは「授業の実践力」の養成を行うことが、今の学校教育の現場において直結する課題であり、教員養成系大学の教育内容にも密接に関連する重要事項である。

今回の国語科における模擬授業の展開から、担当教員が示した教師の力量としてのポイントについて、その教示の内容やタイミングを模擬授業の

記録により明確にし、それに伴う学生の回答や内省報告レポートの変化を時系列に記録、整理することによって、教師を目指す学生の、自らの教師としての力量について、どのような観点で分析、検討し、どのように変動していくのかを確認することができた。

開講当初、模擬授業の「教師としての力量」分析レポートの内容は、担当教員が教示した内容等の確認を行うものであり、担当教員の要求する回答内容を75%以上の学生が基準を満たしていた。これは、「指導者」「学習者」の立場を明確にした模擬授業等の授業様相であるが故、可能となる。模擬授業の授業展開そのものが、事前にある程度の授業想定を行った、授業準備を不可欠に行う前提で進められており、学生は、指導者として初めて授業を行う自分を背景にして、学習者としての反省を可能にしたと思われる。実際のレポート内容についても、明らかに目に見えるような教授内容、教材、プリント、板書、その題材、発問方法等、本稿での授業のための「企画力、設計力」についての具体的な内容の指摘が多いことが分かる。（前出表参照）

つまり、我々担当教員側（プログラムを提供する側）が提供した授業分析の方法論の示唆が、模擬授業という初めて授業分析を行う学生にとっては、分析方法の視点（一方法論）として大きな道しるべになっていることが窺える。担当教員側が、模擬授業に対する着目点や分析方法、評価の視点を示すことが、模擬授業では「学習者」としての学生が、「指導者」の視点を分析する際に大きな影響を及ぼしていると思われる。つまり、どのように教授内容の提示し、確認作業を行い、学習者としての初めて行う実際の「授業を分析する力」の養成には、模擬授業を提供する側の担当教員が、極めて重要である。

さらに、今回の模擬授業が数回展開することにより、学生の内省レポートには、より実際の学校の教育現場で問題となっているような、実践的な教授内容に対する指摘が増加してくる傾向が見られ、模擬授業を提供する側の立場としても興味深い結果となった。

例えば、指導する側の力量として、どのような項目が重要であるかの分析レポートでは、当初、ほとんど指摘のなかった「机間指導」「コミュニケーション方法」「個別指導」などの重要性について、「指導する立場」としての学生のなかでも指摘されるようになってきた。一方、「学習者の立場」としてのレポートでも、机間指導や個別のコミュニケーションの重要性を指摘する分析内容が多くなってきた。現在の教員養成課程にある学生がやはりface-to-faceのコミュニケーションについて、「学習者の立場」になって分析することで生じた重要な分析事項であることが窺える。「学習者」として、これまでの自らの経験、学校での授業経験なども振り返り、「指導者」としての授業を客観的に「第三者」として、自分が今の模擬授業内容などの比較検討などを行う過程のなかから、このような抽象的な表現による項目や分析内容についても、「授業をする側」にとっては、非常に重要な項目であることを指摘するようになった点は、今後、模擬授業を担当する教員としても大変興味深い結果であった。まさに、大学の教職課程での教員を志願する学生に対する課題解決能力、創造力、応用力等の継続的自己教育力の育成に重点を置いた授業内容・方法の工夫を求められる「変化の時代を生きる教員資質能力」の向上のプログラムといえよう。

以上の点を考慮して、今後、模擬授業を展開する大学教育現場の教員としても、様々な実践的教員の養成のための能力向上のプログラム充実を図ることが大切である。

(3) 「指導者として」という視点からの「気づき」

教員に求められる資質能力（実践的指導力の育成）を志向し、受講者である学生の教師としての力量形成の様相を探ることを目的にし、「授業設計力」と「授業実践力」を中心に、「授業を受ける児童（学習者）の立場」「授業を行う授業者（指導者）の立場」「授業を参観する第三者（観察者）の立場」という三者を設定して模擬授業を展開してきた。そのなかで、受講者であるほとんどの学生はおそらく初めて模擬授業を体験し、また、改

めて、前述したそれぞれの立場で模擬授業を体験することによって、小学校の頃からあたり前のように受けてきた授業に対して、新たな「気付き」を生むことができたと思われる。そのことは、受講学生の模擬授業後に行った自己省察のレポートのなかの「授業を行う指導者として、どのようなことを身につけておけば学習者の力を伸ばすことができますか」と「授業を受ける学習者の立場からみて、指導者としてどのようなことを身につけておけばよいですか」という二つの問いによって、「指導者として」という視点でその授業のあり方を考えることで、学生自身が教師として力量形成をするために必要な事項が整理され、より具体化されたと思われる。その大半は、「授業計画」「教材研究」「板書計画」「発言発問検討」等の準備過程についての項目で、「授業内すべてにおけるコミュニケーション能力」「板書実践」「教材の活用能力」「能力に応じた学習の進捗力」等の授業実践の事柄についての記述も見受けられた。このことは、今まで学生自身が学習者の立場としてのみ授業に関わってきたため、特に、教師が行うこのような授業構成などの準備過程という事柄についてこれまでに考える機会がなく、授業というものに関しても、「もっと簡単に行える」・「行っているもの」であるととらえていたのかもしれない。しかしながら、今回の模擬授業を通じて、学生は、児童にとって分かりやすい授業かどうか、良い授業か否かということについて、その教科の目標を達成するために、教師が行う「授業計画」「教材研究」「板書計画」「発言発問検討」等の準備過程の理解度・習熟度が大きく影響していることに気付き、それを達成するための方法、実践力の習得が必要であると考えているといえる。したがって、学生自身が、そこで整理し振り返った具体的な内容に関して、今後、追求を行い、また新たな気付きと発見がなされ、さらなる課題への意欲が生まれると考えられる。つまり、このように模擬授業が、学生の教師としての力量形成の及ぼす影響は重要なものであると考えられる。また、今後、このような授業形態についての実施学年、実施時期や頻度についての検討が必要である。

(4) 「分かりやすい授業」の構築と準備過程

模擬授業は上記に述べられているように、三つの側面（学習者の立場、指導者の立場、観察者の立場）を有するものである。では模擬授業を通して、これまでの生徒・学生生活のなかでほぼ一貫して学習者であった学生自身が指導者の立場から一体なにを感じたかを考えてみることから、模擬授業の効果をとらえてみたい。

おそらく、模擬授業を経験する前段階で学生たちは指導者の授業へ対する取り組み方についてのイメージとして、「簡単・簡易」なもの、準備もそれほど必要としないものであることを想像していたように思われる。模擬授業を経験したことによって気付くことが非常に多いことからそれは明らかである。しかしながら、これは彼等が小学校、中学校、高等学校という十数年間に受講してきた授業の中から感じ、蓄積されてきたものであり、単純に悲観すべきことではないであろう。ただし、彼等が受講してきた授業が果たして全く準備されていなかった、不十分な授業であったかは明らかではない。むしろ準備されていたけれども、そういったことに気付かずに受講できた分かりやすい授業であった可能性もありうる。学生たちは模擬授業以前には学習者の立場からのみで解釈せざるをえないため、どうしても偏った見方からはじめることになる。しかしながら、学生たちが指導者の立場で教師としての力量を形成するために必要な要素として、「教材研究」、「板書計画」、「発問・発言の準備」、「個人での思考とグループワーク（グループでの思考）の使い分け」等を挙げていたことから考えると、授業構成や授業の実施に関わる準備過程などはそれだけ奥深く、難しいものであるということに気付いたのかもしれない。今回、学生たちが感じたポイントとなるような、必要な要素というものは、熟練者は気付くが未熟なものは気付かないというようなレベルのものではない。つまり、そこには客観的にみて「分かりやすい」と感じる授業でも、逆に難しく「児童たちが理解できないのではないか」と感じる授業でも、内容は違えどもどちらにも準備段階があるのだということも理解しておく必要があるであろ

う。ある意味では当たり前と思われることを、当たり前のように一つ一つの授業で行う姿勢を学ぶことが模擬授業であるかもしれない。おそらく数回の模擬授業実施によって、理想的な授業を展開できる力を培うことは難しい。しかしながら、模擬授業を契機として、大学生活の中で学ぶ多くの専門的知識だけでなく、学生に対して分かりやすく教授することへの関心が高まるのであれば、模擬授業が教師の力量形成に重要な関わりをもつと考えられるであろう。

（5）模擬授業の成否

教職課程の学生達が模擬授業を意識し始めるのは、「教育実習」が間近に見え始める実習前1年から半年という時期である。

すでに学生たちは、自らが免許取得に際して基本にとらえる教科に対しては、各教科の概説や教科指導法などの講義の中で学習指導案の必要性やその作成法についての指導・講義を受け、さらに演習内容として実践的学習指導案の作成および「模擬授業（短時間のものや、学生の中から数人が実践例となって行うなど）」を体験していると思われる。

このような経緯をへて、教育実習の事前指導のなかでも期待のかかる「学習指導案の作成および模擬授業」が展開されるにいたるわけである。

模擬授業の成否について、まず冒頭にいえることは、学生達が模擬授業に備えて事前の勉強が出来たか否かが鍵になるということである。それは授業準備の過程が授業本番以上に大切であるということを学生達に十分に知らせることができたかということでもある。

ここで、実際に学生達が自分の行った模擬授業を分析・考察した内容をまとめて示す。

①時間配分について

- ・事前準備の中での「見通し」がしっかり出来ていたかを反省した
- ・自分の進めている状況を冷静に判断できたかを反省している（例えば、タイムスケジュールを上手く調整できたか、児童からの質問を受け取る

余裕があったか、板書に手間取っていないか等)

②内容説明の際、教科書以外の資料・例題の引用について

- ・児童の理解を助け、補足するに足る適切な資料等が用意できたかに心配りした
- ・例題や事例を上手く引用できたか、語れたかに心掛けた

③板書について

- ・分かりやすさ、ポイントの強調などに工夫して書いた
- ・ていねいに書く、書き順をしっかりと示すなどを心掛けた

④効果的な「間のとり方」、「机間指導」について

- ・間の取り方が大切だという認識だけは持っていた
- ・机間指導は先生と生徒のコミュニケーション成立のために、児童各人の理解程度を知るために、授業だけが先行しないよう児童の作業との調和を図るために行った

⑤声や表情について

- ・大きな声、誰にもよく聞こえる声が必要だと感じた
- ・表情は、生徒とのコミュニケーションの成立に欠かせない要素だと感じた

⑥授業スタイル（指導法）の工夫について

- ・個々の生徒にあった指導法を工夫したかった
- ・集中力の持続のためには、一斉指導（テクニックとして）がよいと感じた
- ・もっとグループで学習していく方法を知りたいと思った

以上は、次のように考察される。

学生たちが模擬授業を前にして緊張した様子は容易に想像できるが、それは往々にして技術的な自らの未熟さに対する心配であったに違いない。願わくは、学生時代に「物事に対する総合的な視野、社会を見渡す広い見識」などを身に付けることも大変重要であることを知って欲しい。

例えば、授業内容に筋書きのない話をする必要性を感じた場合、学生は

それを「(軽い感じで) アドリブ」と表現しているが、そこでは広い見識や視野に裏打ちされ、しかも教科の本質を踏まえたうえでの応用が求められていることを認識し、そしてその場に相応しい資料等を提示するようにして欲しい。

板書に関する書き込みも多く見られる。それを見ながら、板書に関するもっと具体的なアドバイスが必要だと感じた。それに関連して、絵図・写真・図表・その他の資料の効果的な貼り付け方やキーワードを提示する板書、授業展開のための課題やポイントを黒板の左(右)上に整理して、授業の終了まで消さない提示法などの工夫と準備が必要である。

学生たちの考察には、具体性が少ない。例えば

- ・テクニックではない、教師の(人間的)力に思いを寄せるような感想
- ・児童がどのように学んでいくかという「学び方」を取り上げるような感想や疑問
- ・知識や技術を伝達する際に不可欠な「人間的影響力」を感じさせるような考察

などは見られない。このことから言えることは、将来教員を目指す学生は、「教育の現場をもっと観る(学生が)」ということに帰結するであろう。教職課程の実施計画では「観察参加実習」があるが、正規のそれだけでなくもこのことは、十分可能である。最近では、社会(教育現場)が門戸を広くあけている故、教育ボランティアのチャンスを活用することでもよい。

学生たちが学校現場において、このような機会をとらえて児童生徒の活動に触れることは、これまでこのような体験の少ない学生たちにとっては極めて有効である。教員養成を行う大学においては、学生たちのこのような状況を的確にとらえ、そして参観(参加)の事前指導として「何を見落とさずにとらえるか、それをどのようにメモするか」という視点とその要領をアドバイスしていくことは極めて重要である。

5 おわりに

最後に、「模擬授業」に対しては様々な意見が寄せられる。不要だというものさえある。教育現場の課題と十分に連携を持たない大学の研究者・教員が指導した「模擬授業」には、どれだけの期待が出来るかという厳しい批判もある。

確かに、検討された指導計画と学習指導案を伴わない、目的意識の希薄な模擬授業であれば多くは期待できない。しかし、今回の考察によって、極めて初期の段階においても、学生の、教員としての資質・力量形成に模擬授業が有効に働くということが明らかになった。

そもそも、教育実践（教育実習も含む）において、指導計画と学習指導案は重要な意味を持つ。この二つをより優れたものにするためには、何らかの形でのシミュレーションが不可欠である。模擬授業はその典型といえる。学生たちが教育現場の生の課題を大学の広い学びの視野の中で考察していくことは、大いに意義深いことである。

先にも述べたように、模擬授業そのものについては、今後、様々な改良の余地があり、新たなる方法の開発が必要であることは誰もが認めるところである。今後、教育現場と教員養成機関とが密に関係を深め、さらなる検討を加えることで、教員の力量形成の方法として確立させていきたいと考えるものである。